この人に聞く　西 伸之さん

# 教員人生をふりかえって

◆プロフィール

1980年　金沢大学法文学部卒

1980年～2020年　新潟県内の中学校に勤務この間新潟県教職員組合新潟市支部の書記長（2001年～2003年）、委員長（2004年～2005年）を歴任。新潟大学非常勤講師も勤める。

編　集　部

## 教師なんか考えてなかった

大学入学時、教師は安月給のわりに仕事は大変だというイメージで、教師になることは全く考えていませんでした。

高校時代、「どう生きるか」を考えていた時、山崎豊子の『華麗なる一族』と出会い、世の中、権力を持った者が強く、正しいことを貫こうとする者は、結局押しつぶされてしまうのだろうか。世の中、力を持っていないとやっていけないのかなと暗い気持ちになりました。それなら、銀行員や商社マンにでもなろうかと、自分の学力や就職のことを考え、法文学部の法学科に入りました。

一方、同じ頃、友人に『小林多喜二』という映画に誘われました。小林多喜二がどんな人物か分かりませんでしたが、映画を見て涙が止まりませんでした。世の中にこんな理不尽なことがあっていいのかという強い怒りを感じたことを鮮明に覚えています。

大学に入学し、歴史を学びたくて、『歴史教育研究会』というサークルに入りました。知らなかったのですが、そこは歴史教育者協議会（歴教協）の大学支部

でした。

先輩は全員教育学部の学生でした。歴史や社会・教育と向き合い、熱心に議論する先輩たちがとてもかっこよく、誠実で真剣に教師をめざすそんな姿に惹かれ、教育学部のサークルでしたが入部しました。

サークルで、社会や教育について学んだり、仲間たちと語り合ったりしているうちに、「教育はやりがいがある仕事だ」と思うようになり、大学二年の終わりに教師になろうとほぼ意志を固めました。また、世の中をよくしていくのは、世論形成に大きな影響をもつマスコミと、未来をつくる子どもたちにかかわる教師じゃないかと思っていました。何らかの形で、今の世の中に影響を与えるような生き方をしたいと考えたことも、教師を選んだ一因でした。

## 「学閥」との関わり

初任校は栃尾市の東谷中学校でした。社会科教師として、組合には当然入るものと思っていたので、六月に新潟県教職員組合に加入しました。

それとほぼ時期を同じくして、勤務校の教務主任から「ときわ会という会があり、いい勉強になるよ」と誘われ入会しました。当時、「学閥」の事は全く知りませんでした。

入会後間もなく、長岡で総会があり、その後の飲み会に参加しました。その雰囲気が何か異様でした。他校の初対面の校長や教頭に挨拶し酒をつぐのがたまらなく嫌で、自分の信念に反する印象を受けました。

翌日、「退会します」と教務主任に伝えました。彼は慌てて、「将来必ずよかったと思うから、入っていた方がいい」と止めましたが、嫌になるばかりで「決意は変わりません」と伝えました。すると今度は校長の家に泊められ、強く翻意を促されましたが、決意は変わらず脱退届を出しました。わずか一カ月にも満たない「ときわ会」会員でした。

学閥を辞めたことで、新潟市への異動は少し大変でしたが、職場で嫌がらせをされた記憶はなく、子どものために、どの先生とも仲良く仕事をできればいいと思いながらやってきました。

二校目は六日町の五十沢中学校で、六年間勤務しました。

五年目に、新潟に異動したいと、勤務校の校長（公孫会）に申し出たら、「自分には西さんを新潟に入れ

る力はない。しかし、あなたの恩師が隣の中学の校長（新陽会）だから、彼にお願いするといい」と言われ、その校長のところへ行きました。

「来年新潟に戻るので、次の年新潟に戻してあげる。ついては、私たちの会に入らないか」と誘われました。さらに「校長になって、あなたが理想とする学校をつくる道もあるよ」とも言われました。

「ありがたいお話ですが、校長になるまで、組合活動など我慢しなければならないことが多いでしょう。それはできません」と、入会は断りました。

## 最初の大きな壁

教職五年目で三度目の三年生担任をしたとき、初めて大きな壁に突き当たりました。学年の女子の問題行動に、取り組めば取り組むほど空回りし、生徒たちの気持ちが離れ、反発される日々が続きました。

後から気づくのですが、当時私は、「クラスはこうあるべきだ」と私の理想を押しつけていただけで、ちっとも生徒の気持ちに寄り添っていなかったのです。様々な事情から自暴自棄になり、自分を捨ててしまっている生徒には全く通じていませんでした。

しんどい日々が続き、一学期の終わりに、教師になって初めて「早く卒業してくれないか」と心の内で思うようになっていました。

そんな私を察したのでしょう。生徒に慕われている優しい年配の先生が夕食で自宅に招いてくれ、「西さん、担任が生徒を見捨てたらだれも助けられないのよ。担任は親と同じだよ」と諭されました。優しい口調でしたが、鋭く厳しいこの助言は、後ろ向きだった私に効き、何とか卒業までやり抜きました。その時期一番荒れていた教え子とは、今も親しく交流があります。

この経験で、これまで「生徒への熱い思い」だけで中学教師をやっていたにすぎず、集団づくりなど大切な学びをちっともしてこなかった自分の未熟さを思い知らされました。

## 集団づくりを学ぶ

教職六年目、前任校の同僚に誘われて、集団づくりの会（新潟県生活指導研究協議会）に参加しました。そこで、尊敬できる先輩や仲間たちと出会い、今日まで一緒に活動させてもらっています。

サークルでは、毎回、実践をレポートにし、集団で

分析・討議します。その積み重ねは、子どもに寄り添い見通しをもった学級づくりや集団づくりの力を、私に育ててくれました。

## アーベルの会の活動

三校目の中野小屋中学校で初めて不登校の子を担任しました。

当時は不登校の子との関わり方など全く知らず、情熱だけで向き合い、毎日家庭訪問をしていました。時には夕食に誘い、「明日はがんばろうな」と約束するのに、翌日も欠席。「約束したじゃないか」と言えば、本人は落ち込む。その繰り返しでした。

それをレポートにして、全国の教育研究会で発表しました。当時共同研究者だった高垣忠一郎さんから、「あんたまじめすぎるわ。だからダメなんや」と指摘されました。私の実践は、ちっとも子どもの気持ちに寄り添わず自分の思いを勝手に押し付け、子どもを追いつめていただけだと気づかされ、目が覚めました。（その後、この教育研究会の不登校分科会を土台に『全国連絡会』がつくられ、貴重な出会いと学びの場になっています）

「不登校の原因はいろいろで、学校にも家庭にも変わらなければならないことがあるだろう。だけど、今大事なのは、目の前の子ども。不登校を成長の糧にするために、親や教師はどんな支援ができるかをともに考え力を合わせよう。新潟にそんな会をつくろう」と、熊谷直樹さんらの呼びかけで、一九九二年の春、高垣忠一郎さんを招いて『アーベルの会（新潟県子どもの発達と不登校を考える会）』がスタートしました。

『アーベルの会』の名前は、横湯園子さんの著書『アーベル指輪のおまじない』が由来です。「アーベル」はドイツ語の「アーバー」（「しかし・けれども」の意）で、「今は学校に行っていないけれど、それは蝶になるためのさなぎの時期なのかもしれない。きっとはばたくときがくる」という意です。

以来、新潟、新津、巻で活動を継続していますが、三〇年近くに及ぶこの会の活動で知り合えた、多くの不登校の子どもたちや親たちに、私は価値観を鍛えられ、子どもや教育への向き合い方を学ばせてもらいました。これからも続けていきたいと思っています。

## 大学での授業とこれから

今、大学で道徳教育論の講義を担当しています。

道徳教科化は、危険で多くの問題があります。一方、やり方次第では、主体的に考えることや世の中の様々な理不尽なことに目を向け、力を合わせる力を育てることができます。また、平和や人権の尊重を学び、持続可能な世界の実現をめざす意義ある時間にもできます。

文科省は『考え議論する道徳』を強調し「一つの価値観を押し付けてはならない」と言っています。それに依拠し、多様性が尊重される共生社会の実現と、自分の生き方を考える道徳教育をやれる力を、未来の教師たちに育てたいと思います。

教師になるかやめるか、揺れている学生が大勢います。彼らに、教師の責任の重さや大変さだけでなく、四〇年の教員生活で感じてきた喜びややりがいを伝え、「やりたい」という気持ちを膨らませられる授業をしたいです。

今、学校現場は、教師が自由にやるのを許さない制度と雰囲気が強まり、寛容さが弱まっています。多忙化も加わり、先生方が萎縮し楽しく仕事できない姿は、子どもたちにいいはずがありません。

先生方が生き生きと働けるようがんばることが、これまで私を支えてくれた方々への恩返しかなと思っています。

（にし　のぶゆき・新潟市）